



<共同研究班活動報告>Susie Scott のシャイネスの社会学

著者	江見 克基
雑誌名	KG社会学批評
号	8
ページ	63-65
発行年	2019-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028024

(3. 共同研究班活動報告)

3-2. Susie Scott のシャイネスの社会学

江見 克基

1 はじめに

「コミュニケーションと自己アイデンティティ」班では片桐雅隆の『不安定な自己の社会学——個人化のゆくえ』の読解によって、集合体＝社会の成員であるところの自己として個人が自分をカテゴリー化することで自己と社会が同時的に構築されるものであるという「認知社会学」の立場を理解した。そうした「認知社会学」の展開として、片桐はカテゴリー化の変化の過程を通して社会の変化をみるという学説史的な方法をとっているが、その試みだけでは自己と社会を媒介する相互行為の次元を具体的に焦点化しながらカテゴリー化の議論に有機的に組み込むことができないという問題が提起される。

本稿では、現代社会で我々をとりまく相互行為に独自の論理を理解する一助として、「シャイネス」をシンボリック相互作用論等のミクロ社会学の知見を応用しながら説明する S. スコットの *Shyness and Society: The Illusion of Competence* (邦題:『シャイネスと社会——能力幻想』) を簡潔にとりあげたい。

2 シャイネスの社会的な理解

スコットは、シャイネスが日常生活の理解のための「動機の語彙」として広く知られていると指摘する (1) (以下、引用はすべて Scott 2007 から)。事実我々はシャイな人かそうでない人かどうかを「社会的な状況における可視的な居心地の悪さと他者との相互行為に対する無気力 (あるいは拒否かもしれないが)」という特徴から区別することができる (1)。しかし、そうして用いられるシャイネスの概念は、①「シャイネスが生得的な心の特性」であり、②「『シャイ』と『シャイでない』人をあたかも完全に分離した二つの集団であるかのように区別でき」、③「シャイネスは否定的で望ましくない経験で、克服すべき個人的な苦悩である」(2-3) ことが自明の前提とされていることをスコットは指摘する。こうした「シャイネスの本質についての自明な仮定に挑戦」し、「心 (the mind) の個人主義的な理論から『シャイネス』が定義され処遇されるより広い社会的な文脈へと焦点を移動させること」(2) が本書の目的である。そのためにスコットはシャイネスを (個人の特性ではなく) 「有意味な社会的行為」(8) として理解し、当事者の言葉をもとにシンボリック相互作用論の知見を応用しながらシャイな人のアイデンティティが社会的に形成されるものであることを示す。

3 シャイネスの社会学のエッセンス

3.1 シャイネスの状況依存性

スコットは「行為者がシャイネスを経験するかどうかを規定する鍵となる要因の一つは、彼らが状況をコントロールし予測することができるかどうかである」(102)という。たとえば、コンビニの店員とのやりとりには緊張しないが“知り合いの知り合い”といった関係性では緊張するということがシャイでない人にもあるように、「あまりよく知らないが、状況的にはもっと積極的にフレンドリーなふるまいをしたほうがよいか、あるいはそうしなければならない人とのコンタクト」(103)は人々にシャイネスを喚起するものだ。スコットはそうした状況を「“中範囲”の出会い」(103)と呼び、その特徴を次のように述べる。

状況が役割を与え、相互行為の脚本＝規定をつくる（pre-script）ほど十分に公的に構造化されていないときも、失敗が問題にならないほどインフォーマルでなくても、不適切な言動のリスクは大きくなり、シャイな行為者の演技上のストレス（dramaturgical stress）は強くなる。(103)

このような意味でシャイネスは状況的なものであり、こうした不確かな状況に演技的に作用しなくてはならないという点ではシャイでない人も同じである。それではいかにして人は自らを「シャイである」と認識するのか。

3.2 シャイな主我とシャイな客我

スコットはシャイな人のアイデンティティの形成をミードの自我の理論を応用して説明する。そこでスコットは「シャイな主我（Shy “I”）」と「シャイな客我（Shy “Me”）」を区別し、前者が不安や恐怖、自覚的な抑制の感覚を指す一方で、そうした「シャイな主我」を他者の視点から眺めた時に与えられるシャイな自己のイメージが後者であるという（38）。そしてこの際にスコットは他者の視点を「有能でふさわしい他者（The Competent Other）」と名づける。それは以下のように定義される。

「有能でふさわしい他者」は、所与の状況における〔相互行為の〕相手（team-mates）とオーディエンスが、自分よりも社会的スキルが高く相互行為のなかで有能でふさわしいと考えるシャイな人々の認識である。(62)

「シャイネス」とはこのようにシャイでない人々が「無能で場違い（incompetent）」であることへの恐怖なのであり、相互行為におけるふさわしい振る舞いについての知識の欠如というのは本質的な定義にはならない（62）。このような意味でシャイネスとは社会志向的（sociable）

であるということもできる。したがってシャイな人にとってシャイでない人たちは「脅威」と感じられるものでありながらも、社会的な志向性から同時に彼らに包摂されることを望んでしまうというアンビバレンスのなかにおかれることになる（64-8）。

3.3 戦略的な演技としてのシャイネス

スコットはまた、シャイネスが社会的に形成されるという主張をゴフマンの理論を用いて説明している。ここではシャイネスのパフォーマティブな側面が考察され、シャイネスは演技とアイデンティティ管理の方法の一つとみなされる（92）。この意味でも「シャイネス」は個人的な特性ではない。むしろ人は「シャイネスする」（92）のであるとスコットはいう。

そうした観点のもとでシャイネスは「二重のスティグマ化」とであるとスコットはいう（96）。つまりシャイな人々は、自分が「無能で場違い（incompetent）」であるという、信頼を失う事情となるような（discreditable）欠陥を自覚し、それが表局域にあらわれないように戦略をたてるのだが、そうした隠蔽自体が目に見える特徴として——たとえば注目を回避するために会話の相手の目を見ないといったことが逆に「失礼」と受け止められるといったように——それ自体が信頼を失わせる（discrediting）演技となってしまう。その結果、「表」と「裏」を強烈に意識するのがシャイな人に特徴的な態度となるのである。

4 おわりに

スコットの議論は「シャイネス」をキーワードにして、どのようにして相互行為は不確かになるのか、そしてそうした不確かさがどのような帰結をもたらすのかを個人の主観的な経験をつぶさに分析することによって説明している。こうした議論を足場にすることで、たとえば「コミュ障（コミュニケーション障害）」といった現代社会の人間類型に関してもそういったカテゴリー化が具体的にどのような相互行為の場で生じるのかという点を説明することができるかもしれない。

【参考文献】

Susie Scott, 2007, *Shyness and Society: The Illusion of Competence*, New York: Palgrave Macmillan.